1人でも多くの女性を乳がんから守れるように ピンクリボンかながわ 昨日・今日・明日

10周年を迎えた「ピンクリボンかながわ」。今でこそ大きな盛り上がりを見せていますが、スタート時はまったく何もない状態から始まりました。「ピンクリボンかながわ」の活動を育てていった4人の皆さんに、これまでの歩みを振り返り、これからの目指すべき方向を語っていただきました。

創立10周年記念座談会

［座談会出席者］

土井　卓子 先生（司会）
湘南記念病院 かまくら乳がんセンター長
ピンクリボンかながわ代表

野末　悦子 先生
川崎医療生活協同組合 久地診療所 婦人科
介護老人保健施設 樹の丘 施設長
前ピンクリボンかながわ代表

福田　護 先生
聖マリアンナ医科大学附属研究所
ブレスト＆イメージング先端医療センター
附属クリニック院長
認定NPO法人 乳房健康研究会 理事長

野口　正枝
公益財団法人 神奈川県予防医学協会
検診計画部部長

先生方や皆さんが作ってきた活動をさらに充実させることが私の責務

土井　卓子先生

思いから生まれた啓発活動

土井　創設から10年という節目を迎えましたが、「ピンクリボンかながわ」はまず、どのような経緯でスタートしたのですか。

野口　きっかけは近隣で働く女性たちに、少しでも乳がん検診に関心を持ってもらいたいと思ったことからでした。当時、職員の中から「ピンクリボンって、あるけれど」と初めて話が出ました。

ピンクリボン運動の具体的な活動がわからなかったため福田先生に伺い、いろいろと教えていただきました。そこで乳房健康研究会をご紹介いただき、当時コスモス女性クリニックの院長だった野末先生に代表をお願いして「ピンクリボンかながわ」を設立しました。

土井　発案は予防医学協会の人たちですね。当時、国内ではピンクリボン運動は進んでいたのですか。

福田　日本のピンクリボン運動の草分けの一つである、乳がんの啓発団体「乳房健康研究会」が2000年にスタートしていました。その前には1978年に設立された「あけぼの会」という患者さんの会がありました。

野末　「あけぼの会」は1977年に乳がんの手術を受けられたワット隆子さんが、手術は成功したのだけれど、再発の問題や術後の治療、副作用などの心配事が解決できなくて悩んでおられる方々に呼びかけて立ち上げた会で、私も会に賛同する1人でした。

福田　患者さんと直接には関係のない市民や医療者が参加して、乳がんの啓発運動を行ったのは乳房健康研究会が初めてです。2000年はまた、マンモグラフィ検診が始まった重要な年でした。活動開始にあたり、むやみにピンクリボンを使っていいのか、アメリカに問い合わせたほどでした。

2002年、乳房健康研究会は日本で最初のピンクリボンウオーク＆ランを行いました。この運動の成功が、その後朝日新聞などによるピンクリボン活動につながりました。2006年は運動が徐々に認知される中でしたから、「ピンクリボンかながわ」を始めるにも、とてもいい流れだったと思います。

土井　初代の代表は野末先生ですね。

野末　私も乳がんの体験者でしたが、私が42歳のときに、高校時代の親友が、乳がんの手術を受けずに、亡くなられました。つらい最期でした。もう、こんなことはあってはいけない。早期発見をしなければならないと、啓発運動をライフワークにしたいと思いました。私自身が乳がんを早期発見できたのも彼女のおかげです。

土井　野末先生の「つらい女性を減らしたい」という思いと、予防医学協会の「検診の受診率を高めたい」という願いが、一致したわけですね。

福田　それまでの概念では、医療者は患者を待つだけで外には出ません。私は医療者が表に出なければいけないとずっと思っていたので、このような活動は絶対必要と考えていました。医療者が表に出て、そこに体験者が語ると説得力があります。一番いい形でした。

ピンクリボン運動の次のステップはイベントから日常への広がりです

福田　護先生

行政や企業を巻き込んで

土井　スタート時から順調でしたか。

野口　いいえ、最初は活動をどう進めればいいか、試行錯誤でした。最初のイベントは野末先生の講演でしたが、当時はボランティアもいない中で、協会内の職員による手作りでのスタートでした。その後、2008年にマンモグラフィ車が県から貸与され、その活用に啓発イベントを開催したり、翌年に行った県庁のライトアップなど、徐々に活動が充実してきました。

マンモグラフィ車をイベントで展示

土井　行政を巻き込んだのは、いいことですよね。

福田　行政の動きを待つのではなく、医療者や周囲が運動を広げて行政を巻き込むことは、市民活動として効果的でした。

土井　そういう意味では理想的な歩みですね。今は行政もすごく協力してくれていますね。

野口　行政に乳がんの相談があると、そこで「ピンクリボンかながわ」を紹介されるなど、一緒に活動する機会が増えました。

福田　企業のサポートも、2000年ごろはほとんどが外資系企業でしたが、このころから国内の企業も社会的貢献として理解を示すようになりました。寄付だけでなく、アイデアや人材の派遣まで、多彩なサポートがありました。

土井　初期には「がん」は企業イメージを損ねるという企業もありましたが、今はもうないですね。

野口　2007年から住宅展示場のハウスクエア横浜で、乳がん体験者を招いて「ピンクリボンフェスタ」を毎年開催したり、横浜ベイスターズ（当時）のチアチーム・ディアーナのご縁で横浜スタジアムに常設ブースを設けていただきました。

象の鼻パークから横浜税関を臨む。横浜三塔*のすべてをピンクにライトアップ

横浜スタジアム内のブース

車内で検診の説明をする放射線技師

土井　患者さんは、今や12人に1人ですから、ピンクリボン運動に関わる人の中にも多くいて、活動に力が入ります。企業の社会貢献が活発な時期でもあり、ダスキンはマットを、キリンビバレッジは自販機を作ってくださって、その工夫に驚きました。災害時用の水缶もありましたね。水道局など公的な機関が協力してくれると運動も急速に広がります。

福田　これも乳がんだからでしょう。検診で見つかり、早期発見をすれば生存率も高い。乳がんは声に出しやすい病気です。ほかのがんはなかなかカミングアウトしにくく、その点ではピンクリボン運動は展開しやすかったと思います。

企業の協力で生まれたマット（左）と自販機（右）

＊横浜三塔：神奈川県庁本庁舎、横浜税関、横浜市開港記念会館

社会の応援、男性の理解

野口　毎年、横浜市水道局から講演の依頼があります。水道局は男性職員が多いのですが、講演の後に担当の方が参加者から「家族に伝えなければ」との声が多いと教えていただきました。

土井　私も驚いています。企業や水道局など、男性が女性の健康のためにすごく協力してくれます。

野口　イベントで皆さんに声を掛けても、当初、男性は遠巻きにしていましたが、「余命1ヶ月の花嫁」という映画が公開されてから、男性から「ブースに寄っていったら」とパートナーに勧めるようになりました。特に若い男性に多く感じます。

土井　男性が女性の健康を大切にする。それを表現していわのが「ピンクリボンかながわ」ですね。ピンクリボン運動が男性にも広がってきた証明ですね。

期待されるアドバイザー

土井　ボランティアも増えましたが、ピンクリボンアドバイザーの資格ができて、資格を取った人たちがボランティアとして、イベントに参加してくださるのは、うれしいですね。

福田　ピンクリボン活動のスタートは団体や集団でしたが、それでは広がりに限界がありません。個人から個人へ、正しい知識が周りに広がるようにと考えられたのが、ピンクリボンアドバイザー制度です。

野末　随分受けられていますね。

土井　「アドバイザーの資格を取りましたが、お手伝いできることは何がありませんか」と問い合わせもいただきます。前回の大船観音でのイベントでも、ピンクリボンアドバイザーの人たちが活躍してくれました。

野末　皆さんもお役に立ちたくて受けていらっしゃいますから。

福田　ピンクリボン運動はイベント的になりがちですが、常日頃、語れる人が増えないと次のステージに進めません。それがこれからのピンクリボン運動の発展の道筋だと思います。せっかく「ピンクリボンかながわ」がノウハウを蓄積してきたわけですから、意欲あるボランティアの方々と楽しくともに歩み続けていければ、新しい運動に広がると思います。

活動は横浜から全県へ。「ピンクリボンかながわin 鎌倉」では大船観音をライトアップ（2015年）

地域のモデルとして

土井　神奈川は他の地域よりも、イベントがしやすいと思いませんか。県庁、象の鼻パーク、マリンタワー、江ノ島シーキャンドル、大船観音…。同じイベントを開催しても映えます。

野末　揃っていますね。

野口　横浜三塔もライトアップでピンクになりました。

土井　まだやっていないのは小田原城ですね。

野口　あとはベイブリッジでしょうか。

野末　箱根もいいですね。

土井　湯河原町は、女将の会をはじめ街全体が協力してくれました。病院の患者さんの貸し切りもウェルカムといっていただいて、湯浴み着の用意も始まりました。神奈川は温泉でも乳がんの患者さんへの思い入れがあります、と。

野末　私たちのように古い術式で手術を受けられた人は、親しい人でも一緒に入浴することにためらいを感じておられるでしょう。そういう人たちにも声を掛けられます。

土井　乳がんの人を「大切にする」という考え方が、神奈川に定着しようとしています。地域のモデル化ですね。健康に関心の高い企業が乳がんのことをお客様に語ったり、フィットネスのインストラクターたちが乳がんの勉強をし、語ろうとしたり、今、神奈川ではいい方向に進んでいるかもしれません。

三上章彦横浜市中区長、横浜F・マリノス トリコロールマーメイズと横浜スカーフ親善大使とともに日本大通りをパレード（ピンクリボンかながわ2015）

若年からの教育を

土井　それでも検診の受診率が十分でないのは、「大人になったら検診を受ける」という教育が足りないのでしょうか。

福田　よくいうのは「日本は決して予防医学に力を注ぐ国ではない」。その中でようやくここまで来ましたが、伝えることはピンクリボン運動の大きな役割です。アドバイザーにはぜひ、出前チームを作って企業や学校に行ってほしいです。そのためのワークショップも開始しました。

野末　私も大学（医学部）の1年生や小学校の孫のところに、呼ばれて行ったこともあります。

土井　「ピンクリボンかながわ」でも、県内の大学、女子大など、たくさん出向いています。林文子横浜市長も関心を示してくださいましたが、まだ、やらなくてはならないことがたくさんありますね。

野口　事務局に若いお嬢さんが来られ、1人は乳がんでお母さんが亡くなられ、1人は今闘病中でした。「もし、ピンクリボン運動をもっと早く知っていたら、母を無理矢理にでも検診に連れて行った」といいます。私はリーフレットを渡すときに「これはあなたの分、これはお母さんの分」と2枚渡します。

野末　私も学生に講義をさせていただいた時、男子学生にはお母さんや恋人のためにもといっています。

イベントから日常へ

土井　今、乳がんの患者さんは12人に1人といわれます。他人事といっていられません。多くの人は自分の周りに1人か2人、乳がんの患者さんがいます。その患者さんの話を聞いて「検診が大切」と諭す。それがピンクリボン運動です。それが普通にできる社会、ピンクリボン運動を通じて、医療に対する私たちの接し方の新しいモデルを作っていけるのではないかと思います。

土井　イベントやライトアップから、皆さんの協力とともに、活動も変化してきました。

福田　活動を理解し情熱を注げるボランティアを増やしたいです。ピンクリボンアドバイザーは6000人を超えました。人が増えれば、いろいろな考え方が生まれます。例えば看護師さんのノウハウで活動を活性化したり、医師のグループや患者さんが作るグループなど、さまざまなグループが現われるでしょう。それらがネットワークを組んで、乳がん患者さんをどう支えるか。いいモデルができるでしょう。

野末　私はピンクリボンかながわの10周年記念イベントを何かめざえたいです。1つは、10周年のウオークです。もう1つは、地域の保健師さんたちは担当地区の受診率を上げたいと思っていますから、その体験をレポートしていただいて、優秀なグループを表彰したいと思います。

野口　東京のピンクリボンウオークが話題になりますが、神奈川では大船観音や江ノ島を結ぶ湘南ウオークの話があり、ぜひ、成功させたいです。

土井　夢はたくさんありますが、「ピンクリボンかながわ」は必ず実践してきました。実践したことを後につなげることが大切です。今後は乳がん検診にエコーが入ってきますね。

話題を呼んだZAIM（横浜市中区）のアート（ピンクリボンかながわ2009）

福田　世界に先駆けてエコーが入ると、それをまた、皆さんに伝えなくてはいけません。そこでもこの運動は重要な意味を持ちます。日本ではあまり草の根運動は根付きませんが、ピンクリボン運動は医療界で最も成功した草の根運動です。専門の知識と、ミッション、ビジョン、パッションで乳がん早期発見運動と、乳がんに優しい社会の構築を進めたいです。

土井　目的は「伝えること」ですね。医学生だった時に女性を支える医療に誘ってくださった野末先生、乳がんの世界に引っ張ってくださった福田先生。お2人の力と予防医学協会が育んできた「ピンクリボンかながわ」を、さらに充実させていくのが、私の責務だと思っています。これからも頑張りたいと思います。

野末　命ある限りお付き合いします。

野口　現在の「ピンクリボンかながわ」があるのも、福田先生、野末先生、代表としてお力添えいただいている土井先生のおかげです。今度ともよろしくお願いします。

つらい思いをする女性と家族が減るように、啓発は私のライフワークです

野末　悦子先生

まだまだやりたいことがたくさん活動の中で社会の変化を実感します

野口　正枝部長